朝野洋一教授の人と業績

早　川　唯　弘
小　野　寺　　淳
葉　　倩　瑋

朝野洋一先生は，1975年10月に茨城大学教養部助教授として着任されて以来，30年余の長きにわたり，本学の発展に尽力してこられた。穏やかなお人柄で，人望の厚さゆえ，1991年４月に教授に昇任されると，評議員，大学教育研究開発センター副センター長，生涯学習教育研究センター長，附属図書館長と，要職を歴任されている。在任期間の３分の１余りを役職併任で過ごされた例は少なく，このこと一つをとっても本学のために献身的に取り組んでこられたことが理解できる。なかでも，先生は教務に明るく，大学教育研究開発センター設立準備委員会の段階から携わり，当時の改革の流れに沿って教養科目の科目名を主題と授業題目で表そうとする意見に対し，担当教員の交替や単位互換にも対応できるように，従来の分野・科目名（固定的）を残しつつも可変的な授業題目を設ける案を提案された。近年では，附属図書館長時代にPR委員も兼務され，教職員と学生が投票してロゴマークの選定を行う方法を提唱されるなど，常に学生を意識されてきた先生の姿勢があらわれている。

また先生は熱心に学生指導にあたられ，高等学校教員や公務員など多くの卒業生を輩出された。2000年８月に再発足した茨城地理学会の会長を務められ，県内の地理研究者，地理教育者，そして卒業生も参加する学会の運営もリードされている。部活動にも深い理解を示され，教養部の人文地理学の先任教授であった櫻井明俊先生の御退官後，20年余り，茨城大学バトミントン部・同OB会の顧問を引き受けてこられた。北関東五大学や関東甲信越の大会には応援に駆けつけ，学生たちと親しく歓談されている。

御経歴の中で特筆すべきは，発足後の早い段階から大学入試センターの委員を務められたことである。1978年から1995年まで，教科専門委員会委員と試験問題特別専門委員会委員を２度務められ，新教育課程試験問題調査研究委員会委員など，17年間も委員を歴任された。先生は大学院在学中から高等学校の非常勤講師をされ，また中学校・高等学校の教科書執筆にも携わられた。こうした先生の御経験は，適切な入試問題の作成を求められる大学入試センターで，欠くことのできない存在であった。おそらく，これほど長く委員を務めた方は少ないであろうから，先生に寄せられた信頼はたいへんなものであったといえる。

朝野洋一先生は人文地理学のなかでも農業・農村地理学を専門とされ，伊豆半島や酒匂川流域を対象とした詳細な地域研究をされた。また一方で，ドイツの農業地理はもちろんのこと，工業地理や社会地理についても翻訳・紹介されるなど，ドイツを中心とした幅広い教養に基づくヨーロッパ地誌に深い造詣をもたれている。さらに，長年にわたる大学入試センター委員の経験，ならびに高等学校等の教科書執筆に携わられたからであろうか，日本語訳されたドイツ地理学の諸概念を再検討されるなど，地理用語についてもしばしば論及されている。このような先生の研究の歩みを，以下概略してみたい。

若き日の先生の代表作は「酒匂川流域における産業組合の空間的展開」（茨城大学教養部紀要10）であろう。農業の発展段階を反映する産業組合に着目し，その設立時期と理由，分布の特色を商品

生産の地域的発展段階と関連付けて考察した画期的な論文である。酒匂川流域の水稲作地帯では購買組合，ミカン栽培地帯では販売組合が多くなるなど，商品としての米とミカンの差が産業組合の組織や機能に影響を与えたことを実証しており，その手堅い調査は修士論文の一部とは思えないほどレベルが高い。

また，後年には，科学研究費補助金（国際学術研究）「仏教伝播第三の道：ヒマラヤ・チベットルートに関する日中合同研究」に参加され，２つの論文を書かれている。「チベット拉薩市における漢族出稼ぎ農民による施設園芸」（茨城大学教養部紀要27）と「チベット・ラサ市近郊の民家」（茨城大学教養部紀要30）である。前者の論文では，大縮尺の地形図のない地域で，直線距離を10数キロにわたって歩き，ビニルハウスを一つずつ確認して地図化を行っている。若き日に詳細な土地利用図を作成した先生の，本領発揮というところであろうか。

先生は自らをアームチェア・ジェオグラファーと自嘲されるが，大学の要職を歴任されていたために，フィールドに出る機会を失わざるを得なかったのである。大学に出勤しつつできる仕事として，先生は学術書の分担執筆や事典類の項目を数多く担当された。巻末の業績目録にみられるように，『航空写真集　茨城県』，『茨城県大百科事典』，『週刊朝日百科４-35　日本東部　茨城・栃木』，『ブリタニカ国際大百科事典』，『水戸の近代100年』，『地図で読む百年　関東Ⅱ』では，県内の農村や都市を紹介する項目を担当され，茨城県の地理は朝野洋一との評価を得ている。また，語学堪能な先生は多くの訳書も公表された。英文ではグレゴー著『農業地理学―その課題と展望―』（山本正三・斉藤功共訳），独文では「H. カロールの農業地理学の考察体系と南アフリカ，カルー地方の農業景観」（山本正三共訳），デーゲ著『ルール工業地域―EC の心臓部―』（佐々木博・田代百代共訳），マイヤーほか『社会地理学』（石井素介・水岡不二雄共訳）がある。

たいへんな読書家であることは周知のことではあるが，先生は外国小説も愛読されているとのこと。とくにお好きな小説家は競走馬シリーズで知られるディック・フランシスと，リーガルサスペンスのジョン・グリシャムであるという。フランシスの小説ではイギリス南部，グリシャムではアメリカ南部の風景を思い描く。登場する地名をタイムズ・アトラスで確認するなど，滞在経験のある土地はもちろんのこと，旅したことのない世界各地を，小説とアトラスで旅されていたのである。幅広い教養の一端が，垣間見えるようである。

朝野洋一先生を，一言で表するならば，貴公子である。折り目正しく，理路整然と講義される語り口は，ダンディそのものである。教壇の貴公子の教えで，地理好きになった学生も多い。先生のお人柄を，エピソードを含めて紹介したい。

先生は教育一家に育った。平塚江南高等学校を卒業された後，東京教育大学理学部で地理学を専攻され，青野壽郎教授の指導を受けられた。大学院に進学されると，当時の第一講座（人文地理学）では，毎年12月下旬に伊豆半島の下田市で野外巡検を実施しており，朝野先生も修士１年から参加された。附属臨海実験所の大部屋に雑魚寝し，昼間は実験所のおばさんが作ってくれたにぎり飯を弁当に，調査に出たそうだ。初年度は，指導教官である青野壽郎教授の定年退官の年であった。先生の意向で，役所などでの聞き取りや資料収集はやらないことになり，急遽，農地を主とする土地利用調査に切り替えられた。地元の文房具店で画板・分度器・方位磁石を購入し，畑の向きや傾斜を測定したという。地籍図のコピーを持ち，朝から日暮れまで一筆毎の土地利用調査を行った。耕作放棄で藪になってしまった農地・果樹園も多かった。夕食後の報告会の折りに，藪の中の夏ミカンを食べた話をしたところ，青野教授から「将来あるものが，そのようなことをするものではない」とたしなめられたそうである。ひもじい思いをしながら，土地利用調査をしていたのだから，仕方がない。この時の夏ミカンの味は，格別であったろう。苦労された土地利用図の成果は『現代地理調査法Ⅳ　地域調査』（朝倉書店）に掲載されて

いる。

留学時代の友であり，世界的なトランペット奏者である桐朋学園大学教授田宮堅二先生から，次の一文をお寄せ頂いた。御多忙の中，快く御寄稿いただきました田宮堅二先生に厚く御礼申し上げます。

朝野先生と私の接点は，1968年先生と私がDAADの奨学生としてドイツに留学し，ライン河畔のボッパルトで語学研修を受けた最初の8週間です。東京教育大学で私の兄の先輩としての朝野さんが，それこそ朝食から深夜のクナイプ（飲み屋）で飲み潰れるまで生活を共にする仲間となりました。

当時の先生の姿は好男子という言葉が一番ぴったりくる端正な方でした。日本料理指導の会を私が調子に乗って企画すると，木を削って作った手製のお箸を持って参加されました。目につく物をすべてスクラップブックに貼りつけるものしり博士で，今日の先生の姿を予知させるものでした。

私が地面に落ちたミラベル（スモモの一種）を拾って食べようとすると朝野先生が一言，「落ちたものは食べないこと。樹になっている実をもぎ取って半分に割り，虫に食われているかを確認してから食べること。但し警察に捕まっても，私の関知するところではありません」と教えを頂きました。昨年，茨城大学に半期ほど参りました際，先生に再会致しました。ボッパルト時代と同じ輝く笑顔で話される姿に，あの濃度の高い8週間へタイムスリップ致しました。

このように博学で折り目正しい先生の姿は，若き日々より培われたものであった。親しく接して頂いた我々や学生にとって，先生の御退職は寂しい限りではあるが，今後も茨城大学の発展を見守り頂き，また茨城地理学会の牽引車として，益々の御活躍を祈念いたします。なお，本稿の執筆に際しては，先生の教え子である筑波大学大学院生藤田和史氏に御尽力をいただきました。記して，感謝申し上げます。